

エル・コレヒオ・デ・メヒコ 経済・人口研究センター

El Colegio de México, Centro de Estudios Económicos y Demográficos

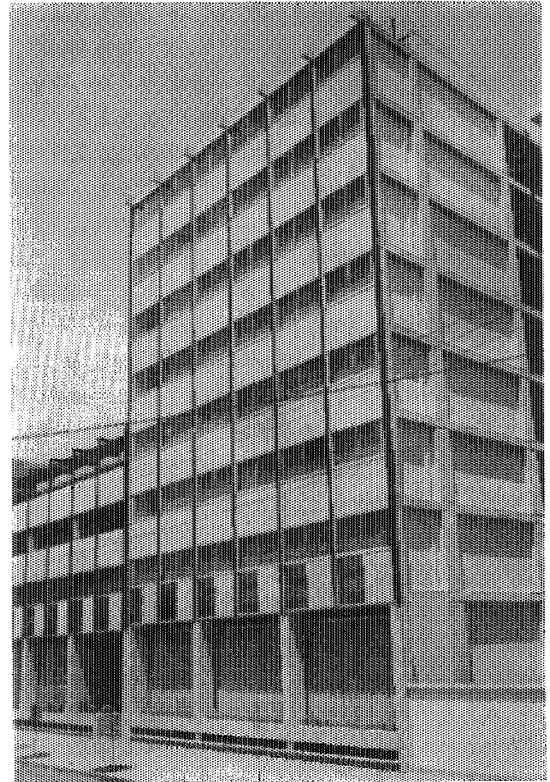
I はじめに

ラテン・アメリカ諸国には、植民地時代からの長い歴史と伝統をもつ著名な大学が各地に存在している。しかし、大学院の課程を設けているものがきわめて少ないため、より高度な専門的知識や技術の修得を志すものは、欧米諸国の大学に留学し、マスターやドクターの課程を履修するのが長い間の慣例となってきた。しかしながらもともと、民族主義的、地域主義的感情の強いラテン・アメリカの知識人の意識の根底には、欧米諸国の大学に留学するのではなしに、ラテン・アメリカの域内に、欧米諸国のそれらに匹敵しうような高度な学術研究機関としての大学院を設けたいという願望が存在しつづけたといわれる。ここに紹介するエル・コレヒオ・デ・メヒコはそのようなラテン・アメリカの知識人が長い間いだき続けてきた願望の具体的な結実の一つとして、大きな期待と評価を浴びつつある。

さて、そのエル・コレヒオ・デ・メヒコという名称についてであるが、これをそのまま邦訳すれば「メキシコ(単科)大学」ということになる。しかし日本における大学とはかなり趣を異にしていて、教育機関としては学部課程のみをもち、マスターおよびドクターからなる大学院の課程のみをもち、研究活動により大きな比重が課せられていること、また、メキシコ市の郊外にある「メキシコ国立自治大学」と混同されやすいという事情もあることから、ここでは当地での名称そのままに、エル・コレヒオ・デ・メヒコとして紹介することとした(以下コレヒオと略す)。はじめにコレヒオの沿革と構成を概観し、ついで経済・人口研究センターの活動について述べることにしよう。

II 沿革と構成

1930年代におけるスペイン市民戦争が、最終的に、王制派、フアランへ党、カトリック教会、などをバックに



したフランコ軍の勝利とその独裁政権の成立へと推移したとき、共和派に属した人々と、とりわけ知識人の多くが国外に亡命したことは周知のとおりであるが、当時メキシコにおいては、「メキシコ革命中興の祖」ともいべきカルデナス大統領(Lázaro Cárdenas)が、1929年以降の世界経済恐慌によって崩壊したメキシコ経済を再建すべく、国内的には大規模な土地改革の実施、労働者保護立法の強化を行なうとともに、対外的には外国資本の支配下にあった鉄道および石油産業の国有化を断行するなど、革新的かつ民族主義的政策を推進しつつあった。

このカルデナス政権は、独立後も文化的な母国(Tierra Madre)とみられてきたスペインにおける市民戦争に際

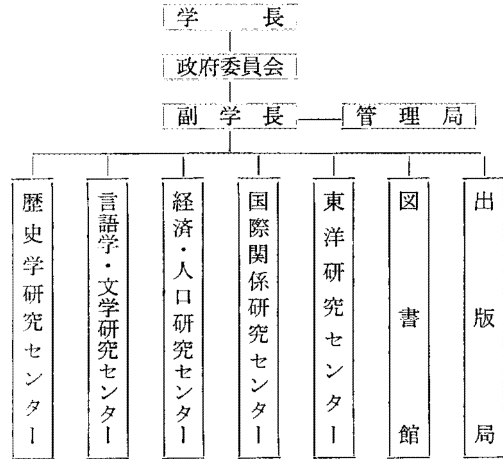
して、終始、共和派支持の立場をとり、フランコ政権成立後はスペインから亡命者の受入れに手厚い保護を与えることになった。このとき以後、スペインからの亡命者の多くがメキシコに流入することになり、それらのひとびとが、やがてその後の1940年代に始まる「メキシコの奇蹟」といわれる急速な経済発展に少なからぬ貢献をもたらすことになるが、コレヒオの歴史もまた、この画期的な事件にさかのぼる。

すなわち、1938年、メキシコ政府は「メキシコ・スペイン会館」(La Casa de España en México)を設立して、亡命知識人に研究上の便宜をはかるとともに、生活面の保護を提供することにした。そして2年後の1940年に至り、このメキシコ・スペイン会館を母体として、メキシコ政府、メキシコ中央銀行、メキシコ国立自治大学、フォンド・デ・クルトゥーラ・エコノミカ書店の4者によって、メキシコにおける高等教育の発展に貢献すべき学術研究団体として発足したのがエル・コレヒオ・デ・メヒコであった。やがて1962年には大統領布令によって大学としての法的地位を確立した。

1940~60年のコレヒオの創成期には、哲学者のアルフォンソ・レイエス(Alfonso Reyes)学長のもとに、所属スタッフの研究成果の出版、歴史学、文学、哲学の講座の開設、歴史学、文学の機関誌の発行などが行なわれていたが、1960年に歴史学者のダニエル・コシオ・ビジェガス(Daniel Cosío Villegas)が学長に就任して以後、「歴史学研究センター」(Centro de Estudios Históricos)、「言語学・文学研究センター」(Centro de Estudios Lingüísticos y Literarios)、「メキシコ近代史研究会」および「国際関係研究センター」(Centro de Estudios Internacionales)があいついで組織された。1963年、歴史学者のシルビオ・サバラ(Silvio Zavala)が3代目学長となり、同年、国連ユネスコ委員会とメキシコ政府の協力を得て、「東洋研究センター」(Centro de Estudios Orientales)が設けられ、さらに翌1964年には「経済・人口研究センター」(Centro de Estudios Económicos y Demográficos)が新設された。1966年、ラテン・アメリカの代表的経済学者として著名なビクトル・ウルキディ(Victor L. Urquidí)博士を学長に迎えて以降、研究面、人事面での国際的交流が強力に推進されつつあるが、経済・人口研究センターの充実と躍進はとくにめざましく、メキシコ経済はもとよりラテン・アメリカ経済研究の重要な拠点としての地位と名声を獲得しつつある。

以上にのべた各研究センターのほかに、コレヒオは付

属図書館、出版局、語学用ラボラトリーおよび管理局を備えており、全体の運営は学長をふくめた6人の政府委員会によって統轄されている。



コレヒオの所在地はメキシコ市のほぼ中央にあるローマ区のグアナフアト通り125である。そしてこの通りをさらに1ブロック先に行くと、コルドバ通りとの角に日本大使館がある。

III 経済・人口研究センターの活動

経済・人口研究センターの歴史は、コレヒオの各センターの中で最も新しく、1964年にメキシコ中央銀行(Banco de México)、国立外国貿易銀行(Banco Nacional de Comercio Exterior)、国立開発銀行(Nacional Financiera)の後援を得てその活動を開始した。同センターはその設立の目的として次の4点をあげている。

- (1) 国の内外の大学において経済学、政治学、社会学、数学等の専門課程を修了した者に対し、より高度な大学院レベルの教育と訓練を施す。
- (2) 経済発展および人口問題を総合的に研究する。
- (3) 博士号の取得候補者を養成する(現在同センターにはまだ博士課程は設置されていないため、当面、修士課程修了者で、博士課程進学希望者は指導教授の推薦により、欧米の大学に留学することになっている)。
- (4) 大学教授を養成する。

以下、同センターの活動を教育活動、研究活動、出版活動の順にみてゆくが、はじめに述べたように、研究活動の比重が圧倒的に大きいことはいなめない。

1. 教育活動

現在、経済学と人口論の修士課程が設けられており、

研究機関紹介

修了期限は2年、授業はセミナーが中心となり、学位を取得するためには所定の科目を履修したのち修士論文を提出し、公開の審査をパスしなければならない。同センター設立以来、一貫して近代経済学を中心にカリキュラムが編成されており、ラテン・アメリカ諸国からの留学生も多く、国際色ゆたかである。学生の大部分にはコレヒオ自体の奨学金をはじめ、メキシコ政府、米州機構、フォード財団等各種の奨学金が用意されており、勉学に集中しうる配慮がなされている。

1970年度までに修士の学位を取得したものは合計103名で、経済学65名、人口論26名、統計学12名となっている。同センターにはまだ博士課程が設置されていないため、外国の大学院の博士課程に進むものも多く、他は政府機関、国内の大学での教育職、研究職に従事している。外国人留学生の多い実情にかんがみて(35~40%)、1965年以降、経済学、数学、統計学、英語の4科目について特別コースを設け、出身国の相違にもとづく学力の不均等を是正する努力がはらわれている。

1971年9月に始まる同センター第5期の履修科目は次のとおりである。

〔経済学専攻コース〕

第1学期 数学、統計学、経済理論、経済史、セミナー

第2学期 計量経済学、経済理論、国民所得と成長理論、経済史セミナー

第3学期 貨幣論、経済発展論、国際貿易理論、論文セミナー

第4学期 国際経済理論、オペレーションズ・リサーチ、論文セミナー

〔人口論専攻コース〕

第1学期 数学、統計学、経済理論、人口論(I)序説と死亡率

第2学期 数学、経済理論、計量経済学、人口論(II)出生率と結婚率、人口データ処理

第3学期 人口論(III)計量人口論、人口予測、労働力論、論文セミナー

第4学期 発展の社会学、人口と発展の相互関係、人口の理論と政策、論文セミナー

以上の学内での教育活動のほか、同センターは学外に対して次のような教育活動を行なっている。

(1) 国の内外の各種教育機関における経済学、人口論のカリキュラム作成に対する協力。

(2) 1969年、70年の2回にわたり、国内の大学教授層

を対象として、メキシコの経済発展と人口増加に関するセミナーを開催した。

(3) ラテン・アメリカ人口センター(Centro Latinoamericano de Demografia)とフォード財団の後援を得て、全ラテン・アメリカの人口問題研究者のセミナーを組織し、「人口の理論と統計上の欠陥をもつ国へのその適用」をテーマとして第1回会合を開いた。

2. 研究活動

同センターの研究活動はウルキディ学長、カブレラ(Gustavo Cabrera Acevedo)同センター所長をはじめ教授、研究員、客員研究員等45名によって行なわれており、主たる研究目標を次の4点においている。

(1) メキシコの経済発展の決定的要因の研究

(2) メキシコの人口の実態の分析と予測

(3) メキシコの経済発展と人口増加との相互関係の研究

(4) 上記の諸問題の研究に携わる経済学者、人口問題研究者、社会学者の資質の向上

全般的傾向として、理論的研究よりは実証的研究に重点がおかれており、方法論的には計量経済学、オペレーションズ・リサーチなど近代経済学の手法が中心となっており、現状の正確な認識と分析を提供することによって、政策決定の参考に資するという実践的姿勢がかなり明白に打ち出されている。このことは以下の研究課題からも十分にうかがえよう。

〈メキシコにおける死亡率の分析と予測〉

この研究は性別、年齢グループ別の死亡率表の作成をめざしており、すでに1930年、40年、50年、60年についての表が作成され、65年、70年、75年、80年についての表が作成中であり、同時に過去の1895年、1900年、10年、20年についての推計作業が計画されている。

〈メキシコにおける出生率の分析と予測〉

メキシコ国立自治大学の社会科学研究所およびラテン・アメリカ人口センターとの協力のもとに、コロンビア、チリ、メキシコの農村出生率比較のアンケート調査が行なわれており、他方では、出生率の相違をもたらす要因の解明のため、都市、農村の出生率格差の分析が行なわれている。

〈メキシコにおける各州間の人口移動〉

この研究は人口センサスごとの各州間の人口移動の計測と年間人口移動の推定、ならびに定住者と非定住者の性格の相違の解明をめざしている。すでに1950年と60年間の人口移動の分析が完了し、年間人口移動の推定が

始められており、非定住者の性格の分析は1960年センサスの1.5%のサンプルにもとづいて行なわれている。

〈メキシコにおける労働力の構成と予測〉

このプロジェクトの目的は労働力の需要と供給の予測を行ない、かつ経済の傾向ならびに教育制度の傾向との関係を検討することであり、1960年センサスの1.5%サンプルに基づいて行なわれる。同時に、職業別の労働力の構成について各センサス間の比較が行なわれており、すでに総労働力の性別および年齢グループ別の予備的予測が行なわれた。

〈メキシコの経済発展における高等教育と科学技術〉

この研究は高等教育と科学技術の研究が経済発展におよぼす影響の検討を目的としている。一方で1956~64年におけるメキシコの高等教育の構造とその発展を分析し、他方では、科学技術の研究にあてられた資金の額とその配分関係を分析し、さらに外国の技術の吸収のための種々の方法が検討されている。

〈メキシコにおける人口集中の研究〉

この研究は人口の分布を人口定着地域の規模との関係でとらえることを目的とし、地域内および地域間の人口移動、都市への人口集中、都市の同質性等のインディケータを作成しつつ、これらの現象の同時的分析のために適切な集中度の計測作業が、1921年、30年、40年、50年、60年の各人口センサスに基づいて行なわれている。

〈中小都市における商人階級の構造〉

最近40年間にメキシコで行なわれた農地改革と経済発展は、小売商人、中間取次業者、ブローカー、高利貸などの商人階級の発生をもたらした。かれらの多くは中小都市に住み、農村への物資の供給や農産物の商品化、地方における投資、地方の政治的、社会的構造の形成においてしだいに重要な役割をはたしつつある。この研究はこのグループの構造を、(1)同質的地域の決定、(2)都市化の地域的特徴の分析、(3)農業と結合した都市の構造、(4)中小都市における商人階級の性格と動態、という諸側面から解明することをねらっている。

〈所得配分の不平等と賃金構造〉

メキシコでは近年、所得配分の不平等についての関心が高まっており、その実態の分析が強く要望されている。この研究では、国内の11の都市における所得配分の不平等について種々の方法での計測が行なわれ、さらに、これらの計測結果を職業別、産業別、地域別の労働者およびその家族の収入の不平等を検討するために、より多くの局面へと一般化する作業が企図されている。

〈メキシコの人口問題に関する書誌的研究〉

メキシコの人口問題に関する統計、文献、資料の集大成のための作業が行なわれている。

〈メキシコの人口センサスにおいて用いられた諸概念の比較研究〉

この研究は今後の研究の参考資料として、1895年から1960年にいたる各人口センサスにおいて用いられた諸概念を比較分析し、その解説と統一のための努力が払われている。

〈メキシコにおける農村・都市間の人口移動〉

新しい研究方法として直接面接聴取法を採用し、(1)大都市への人口移動の動機と傾向、(2)農村、都市における人口移動誘発要因、(3)人口移動がその後の農村、都市の発展に及ぼす効果、等について研究が進められている。

〈メキシコにおける労働力の形成〉

メキシコの経済発展を規定する最大の経済変数としての労働力の形成の量的、構造的変化を歴史的に詳細に分析しつつある。

〈ラテン・アメリカ諸国の物価、賃金、消費構造の比較研究〉

このプロジェクトはラテン・アメリカ諸国の16の経済研究機関との協力のもとに行なわれている。(1)労働に対する報酬の水準の職業間、国際間、産業間の比較、(2)家計の消費構造の比較、(3)物価水準の国際比較、のための資料の収集、整理が行なわれている。

〈メキシコの経済発展と都市の発展〉

メキシコにおける都市化のプロセスは、とくに1940~60年に例外的な速度で進展した。この研究は、都市化の現象が国の経済発展の結果であると同時に、工業の発展や社会構造の変化の決定的要因でもあるという視点から、この因果関係を解明することをねらっている。

〈メキシコにおける企業および企業者の形成〉

この研究は、(1)メキシコ人企業者の社会学的分析、(2)メキシコの企業の発展の歴史的研究、(3)メキシコ企業の組織形態と資金調達機構、の諸側面から、メキシコの経済発展における企業と企業者の役割を分析しつつある。

〈メキシコの工業における生産関数、技術変化、要素需要等の研究〉

メキシコの工業の代表的部門についての生産関数、生産要素の代替の弾力性、生産性の成長率等の算出作業が進められている。

〈メキシコの経済発展の歴史的再検討〉

このプロジェクトは、1920~60年期のメキシコの経済

発展についての従来の諸研究の共通のボトルネックとなっている、革命内戦期の統計、資料の不備を重点的に補強し、これまで不明確であった事実関係の確認と再検討を行なうとともに、その結果にもとづいて、メキシコの経済発展についての計量経済学的分析と予測を行なうことを目的として作業が進められている。

以上の一連の研究課題のほか、同センターは、内外の研究機関への委託研究、特別研究員招へいなどの形で、次の研究を進めている。

- 〈メキシコの工業の地域的構造と発展〉
- 〈メキシコにおける地域的二重構造と経済発展〉
- 〈メキシコにおける外国投資〉
- 〈メキシコにおける公共投資の資金調達〉
- 〈メキシコの工業化政策〉
- 〈第2次大戦後のラテン・アメリカ諸国の為替政策〉

3. 出版活動

同センターの研究成果はそのほとんどが機関誌 *Demografía y Economía* (年3回発行) に発表されている。また、すでに完成された研究については順次単行書の形で出版されており、現在までに出版されたものは次のとおりである。

Raúl Benítez Zenteno y Gustavo Cabrera, *Tablas Abreviadas de Mortalidad de la Población de México*, 1967.

Victor L. Urquidi y Adrián Lajous Vargas, *Educación Superior, Ciencia y Tecnología en el Desarrollo Económico de México*, 1967.

Raúl Benítez Zenteno, *Metodología de la Encuesta de Fecundidad Rural; La Experiencia en México de la Etapa Piloto*, 1969.

Centro de Estudios Económicos y Demográficos, *Dinámica de la Población de México*, 1970. (本書は1970年度の Premio Anual de Economía — Banco Nacional de México によってその年の最も優秀な経済学図書に与えられる賞——を受賞した)。

IV おわりに

すでに歴史学研究センターと言語学・文学研究センターには博士課程が設けられており、経済・人口研究センターもその準備を進めつつあるといわれる。コレヒオは学生総数160名、うちラテン・アメリカを中心とする外国からの留学生が約60名、教授、研究員は94名で、それらスタッフの国際交流も盛んである。教授陣と学生との

比率はマン・ツー・マンに近く、また学生は所属以外のセンターの科目も聴講できるので、各センター内ではもとより、コレヒオ全体が親密な家族的雰囲気に含まれていることは貴重なものに思われる。

メキシコでは、わが国の国会図書館に相当するような総合的図書館はまだ整備されておらず、大学、国際機関、銀行等の付属図書館がそれぞれの特色を生かした収集を行なっているのが実情であるが、コレヒオの図書館は、経済学、歴史学、言語学の分野に関してはすでにラテン・アメリカ随一という定評を受けている。

わたくしは、1970年4月から経済・人口研究センター客員研究員として研究に従事しつつあるが、本稿をまとめるに際し、マルティネス副学長ならびにカブレラ同センター所長に多くの教示をいただいた。ここに改めて感謝の意を表したい。

(在メキシコシティ海外派遣員 丸谷吉男)